

J.S.Bach Sinfonien

バッハ シンフォニア

第4番 ニ短調 BWV790

- 楽曲分析と演奏法 -

著者：市花 真弓

目次

はじめに、インヴェンションとシンフォニアについて	3
1. バッハ「シンフォニア」第4番 d moll BWV 790 楽譜	4
2. 主題と対旋律と装飾記号の演奏について	6
3. バッハ「シンフォニア」第4番 d moll BWV 790 第I展開部の楽曲分析と演奏法について	7
4. バッハ「シンフォニア」第4番 d moll BWV 790 第II展開部の楽曲分析と演奏法について	10
5. バッハ「シンフォニア」第4番 d moll BWV 790 第III展開部の楽曲分析と演奏法について	12
6. バッハ「シンフォニア」第4番 d moll BWV 790 第IV展開部の楽曲分析と演奏法について	13
7. 楽譜に1~4のアナリゼの内容を表記しました。 テンポ、強弱も記しました。	15

■はじめに

2003年度からメールマガジンの配信システムを利用しました音楽講座としまして、「バッハ インヴェンションを弾いてみよう！- 楽曲分析と演奏法 -」の発行を始め、2012年にPDF書籍版に移行致しました。思いがけず、多くの皆様にご利用頂け、パソコンの前で頭が下がる思いであります。

2019年3月～2020年5月、バッハ インヴェンション全15曲の全面作り直しを致しましたが、シンフォニアも同様に全面作り直しをする事と致しました。作る度に新たな発見などあり、このように音楽に向き合っている今に感謝しております。(2020年6月)

■インヴェンションとシンフォニアについて

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ (Johann Sebastian Bach 1685-1750) のクラヴィーア曲は、その大部分がケーテンの宮廷楽長時代 (1717~1723) に書かれました。インヴェンションとシンフォニア BWV 772-801 (*Inventionen und Sinfonien* BWV 772-801) も、「フランス組曲」「イギリス組曲」「平均律クラヴィーア曲集第1巻」などと共にケーテン時代に書かれた作品の一つとなります。クラヴィーア曲の多くは、教育目的として書かれました。バッハには、自身が「いずれも生まれながらの音楽家」と誇らしく語る息子たちがおり、とりわけ豊かな才能に恵まれていた長男ヴィルヘルム・フリーデマンの教材として「ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハのためのクラヴィーア小曲集 (*Klavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach*)」(1720年頃) が編まれました。この曲集の中に「インヴェンション」の最初の形が見出される事となります。そこでは、2声の曲が「プレアンブルム」(*Praeambulum*)、3声の曲が「ファンタジア」(*Fantasia*) と題されていました。その後、バッハはさらに改訂し、1723年に配列も変え、題名も2声曲を「インヴェンツィオ」、3声曲を「シンフォニア」と改めました。

自筆浄書譜には次のような表題があります。

「クラヴィーアの愛好家、とりわけ学習希望者が、まず2声部をきれいに弾き分けるだけでなく、さらに上達したならば、オブリガートの3声部を正しくそして上手に処理し、それと同時に、すぐれた楽想を得るだけでなく、それらを巧みに展開すること。そしてとりわけ、カンタービレの奏法を身につけ、それとともに作曲の予備知識を得るための、はっきりした方法を示す正しい手引き。」

シンフォニアもインヴェンション同様に、曲集に採用されています。15調は、ハ長調 - ハ短調 - ニ長調 - ニ短調 - 変ホ長調 - ホ長調 - ホ短調 - ヘ長調 - ヘ短調 - ト長調 - ト短調 - イ長調 - イ短調 - 変ロ長調 - ロ短調 と 嬰ヘ短調、嬰ハ短調、変イ長調を除く 15調が上行形に整えられています。(シャープ、フラット4つまでの調です。)

Sinfonia 4

Johann Sebastian Bach
BWV 790

The musical score for Sinfonia 4, BWV 790, is presented in five systems. Each system consists of a right-hand staff (treble clef) and a left-hand staff (bass clef). The key signature is G minor (one flat) and the time signature is 3/4. The score is characterized by its rhythmic complexity, particularly in the right hand, which features numerous sixteenth-note passages, trills, and slurs. The left hand provides a more rhythmic accompaniment, often using triplets and sixteenth-note runs. Fingerings (1-5) and articulation marks (accents, slurs) are meticulously placed throughout the piece to guide the performer.

2. 主題と対旋律と装飾記号の演奏について

わずか 23 小節の短い曲のうち 14 小節が主題で占められているフーガ的性格の強い曲です。叙情的な美しさに溢れた曲で、タイで結ばれた音進行が多いのが特徴です。

主題と対旋律です。

第 3 番は主題に対し常に 2 つの対旋律が保持されていましたが、第 4 番は一定した対旋律は用いられていません。主題中の動機 a、対旋律中の動機 c、そして、ゲネラルバスがこの曲を構成する上での材料となっています。

装飾記号は、4 小節中声 4 拍目の ♪ (プラルラー) のみとなります。版によっては、多く記されているようですが、原本はこの装飾のみとなっています。

奏法は、

又は、

と演奏して下さい。

装飾記号の演奏に関しましては、演奏者により様々です。演奏の参考にして下さい。